

「みち」

令和4年10月21日 発行

子どもたちの思いに応えられる教師に!!

今年度も半年が過ぎ、いつの間にか季節の変わり目を迎えています。岩瀬地区音楽祭（合唱・合奏）や新人戦、岩瀬地区陸上交流大会などコロナ禍においても様々対策を取りながら無事に行われ、子どもたちが頑張る姿、元気な姿を見ることができました。

1年の折り返し地点に立ち、子どもたちには、自分たちの成長を振り返るよう促し、学年末になってどんな自分でいたいのか想起させてみましょう。新たな目標が見えてくるはずです。一人一人の子どもたちの「伸び」や「前進」を先生方が捉え、受け止め、認め、そして励ましを与えることによって子どもたちはさらに一步を踏み出すはずです。

先生方も子どもたちを見つめ直し、子どもたちの引き受け方に間違いはなかったかを問い直してみましょう。子どもたちの人間関係の変化や表情、行動をよく観察し、必要に応じて声をかけていかなければなりません。一生懸命頑張っている子どもたち、様々な制限の中でも笑顔を見せてくれる子どもたちの思いに応えていきたいものです。



授業の基盤は、「学級経営」 子どもたちとの信頼関係を大切に！

爽りの秋、集団としての学級の円熟度も高まり、学級の文化が出来あがるころです。「授業で子どもは育つ」「授業の中で集団は育つ」とよく言われますが、その授業の基盤は「学級経営」です。学級経営の大きな課題として、「学び合う学級集団」をいかに育てていくかということが挙げられます。一人一人の子どもたちに目を向け、声をかけ、気かけながら、教師と子どもたちの信頼関係を築いていきたいものです。

学校の主役は子どもたちです。担任の思いが強すぎて子どもたちが背を向けてしまうようではいけません。子どもたちが一人残らず目を輝かせる、笑顔のある学級づくりを期待します。

子どもたちの心に寄り添う教師。聴ける教師。

○肯定的に。「聴き上手」に。

- 教師の話聴くということは、教師を受け入れ信頼しているからであり、友達の話を聞くということはその友達を受け入れ、認めているからです。話を聴けないということは？一方的に話していませんか？子どもたちの声を受け止めていますか？

教師の役割はコーディネート

○縦糸を結び 横糸を紡ぐ

- 教師と子どもを結ぶ信頼関係の糸「縦の糸」と子ども同士が認め合う「横の糸」を太く育てることが人間関係づくりには重要です。教師と子ども一人一人との信頼関係、安心して自分の思いや疑問を吐けるつながりを作らなくてはなりません。

子どもたちが見えていますか

子どもたちの動きを見ているといろいろなことが見えてきます。口に出さなくても子どもたちは何かを訴えているのです。

- 自由時間を設定したときに最初に席を立つのはだれ？
- その子についていくのはだれ？
- 教卓の周りに集まるのはだれ？
- その輪の外側にいて黙っている子はだれ？
- ぽつんと一人である子はだれ？
- その子に話しかける子はいるか？
- 登校時刻が遅くなってきた子はいないか？
- 給食の食べ方が遅くなってきた子はいないか？
- 朝から下を向いて元気がない子はだれ？
- とげとげしく言葉が乱暴になってきたのはいつごろから？
- ノートの文字が乱雑になってきたのはいつ頃から？
- 服装が乱れてきたり、ずっと同じ物を着ていたりするのはだれ？

全体を見るのではなく、一人一人全員に目を向けていきましょう。

指導訪問・授業研究会から



計画訪問や現職教育における授業研究会などで、授業に真剣に取り組む先生方の姿を拝見したり、先生方と一緒に授業について考えたりする機会をいただき感謝申し上げます。ICTの設備が整いはじめ、積極的に活用する先生方が増え、タブレットを自由に操るこどもたちの姿を見て、教育環境がどんどん変わってきていることを実感しています。その活用の仕方今後どんどん磨かれていくのではないかと期待が膨らみます。

授業参観から

白江小5年生の国語<たずねびと>から

自分から声をかけられずにいた子だけでなく、自分の学びに不安があった子も自信をつけていった一場面です。「ねえ、教えて」「そうだね」の関係性はこんな風にじわじわと教室に広がっていくものです。

◎課題確認3分後

- A 「ねえねえ、ここでいいんだよね?」「分からないんだ。」
B 「うん。いいと思うよ。ここが気になったんでしょ。」
「そこに書きこめばいいよ!」

◎その3分後、ふと見ると

- B Aの鉛筆の動きを黙って見ながら、教科書への書き込みを読んでいる。
A 呟きながら教科書に線を引き、書き込みをしている。

◎さらに5分後

- A 付箋紙に考えを書きながら「どう思う?これでいいの?」
B 「うん。ちょっと待って。」自分も不安なのか指示内容を確認し、「いいんじゃないOKだよ。」



校内研修の充実に向けて

コロナ禍で起きていることの一つに「学校間格差」が挙げられています。いまだに一斉授業の形で教師主導の授業を展開している学級、探究・協同を追究し、子どもたちが生き生きと学ぶ学級。この差はどんどん広がるばかり。『級友の背中と黒板を見て、ノートを写してどれだけ学びがあるのか?』という佐藤学先生からの問いかけが突き刺さります。

これからを生きる子どもたちに必要な力とは何かを考え直し、授業について、学びについて私達教師も探究していかなくてはなりません。学校生活の大部分は授業です。授業研究を重ねることで子どもだけでなく、教師もまた学び、成長するのです。

<アドバイザー語録>

- グループやペア学習は話し合うためにあるのではなくずっと一人で考えるためのグループの座席配置である。4人グループは「沈思」の装置である。
<「沈思」 深く考え込むこと いろいろと思案すること>
- 思考は一人でできるが、探究は協同でしかできない。だからグループでの学びが必要である。「思考」は自分との対話、「探究」は異なるもの・多様なものとの対話である。
- 「口と手」で仕事をしていた【教える専門家】から「目と耳（と頭）」で仕事をする【学びの専門家】へ。
- 優れた授業では、教師は、ほとんど話さないし、黒板には書かない。人（教師）から学んでいたことをもの（資料や友達）から学ぶことへシフトする。
- 最も大切なことは、「子どもたちを信頼し、尊敬すること」である。子どもたちは素晴らしい。